



2017年9月5日

熱気球「まもるくん号」の係留飛行で 第23回日韓青少年交流キャンプを支援

共栄火災海上保険株式会社（本社：東京都港区新橋1-18-6、社長：助川 龍二）と、ビーバー・バルーンクラブ（所在地：佐賀県佐賀市、会長：鶴崎 伸一 氏／当社佐賀支社代理店店主）は、9月3日（日）に国立山口徳地青少年自然の家で開催された第23回日韓青少年交流キャンプにおいて、熱気球「まもるくん号」の係留飛行でイベントを支援しました。

今回の日韓青少年交流キャンプは、9月1日（金）～3日（日）までの3日間にわたり行われ、キャンプ2日目となる2日（土）の夜に、参加者27名（韓国16名／日本11名）へのサプライズ企画として「まもるくん号」の夜間係留を実施しました。湧き上がる歓声の中、バーナーの説明や熱気球を実際に膨らませるデモンストレーションを行い、夜間係留イベントは大いに盛り上がりました。

翌3日（日）早朝には、キャンプに参加した27名全員の子供たちが実際に「まもるくん号」への搭乗を体験しました。上空と地上からお互いに手を振り合ったり、記念撮影を撮って係留飛行を楽しんでいました。係留飛行イベントに参加した子供たちからは、「空から眺める景色に感動した。」「いつもは体験できないことなのでワクワクした気持ちになり、一生の思い出になった。」などの声を聞くことができました。また、今回キャンプを主催した施設関係者からは、「熱気球への搭乗という特別な体験をさせていただき、子供たちは大変喜んでいきます。本当にありがとうございました。」というお言葉もいただきました。

当社では、このような地域や社会との交流をこれからも積極的に図っていく方針であり、子供たちの一生の思い出となるよう、この熱気球によるボランティア活動を継続してまいります。



子供たちを乗せ舞い上がる熱気球「まもるくん号」



第23回日韓青少年交流キャンプでの集合写真

日韓青少年交流キャンプについて

1994年から「日韓民間養護施設入所児童のための国際交流」として行ってきた活動で、日韓の社会的養護のもとで生活する子どもたちに国際交流の機会と、隣国の友人としての良い関係を築き、今後の両国のさらなる良好な関係作りのリーダーとなってくれるよう期待を込めて韓国の児童福祉関係の方々と手を取りあい、23年もの間、一度も中止することなく実施してきました。毎年交互に両国を訪問し合っており、第23回目となる今回は、日本が韓国側を迎えました。韓国からは慶南総合社会福祉館を中心とした8施設の参加があり、また、日本も山口県・佐賀県・熊本県の施設が参加いたしました。

熱気球“まもるくん号”の製作背景について

当社が熱気球を製作することになったのは、熱気球の聖地である佐賀県に在住し、長年のボランティア活動に携わってきた鶴崎伸一氏（当社佐賀支社代理店/佐賀鶴崎の店主）が、「体が不自由な方々にも大空の素晴らしさを味わって欲しい」との思いを実現させるために「ビーバー・バルーンクラブ」を結成、これに対して当社も、ふわりと浮かぶ熱気球の姿が人の心を和ませ、そして何よりも、当社社員が参加できる熱気球を活用した社会貢献活動が可能となるとして製作する運びとなりました。なお、これまで製作・導入した熱気球は6機となり、1号機から3号機が引退の後、現在は4号機から6号機の3機の熱気球が飛行しています。

ビーバー・バルーンクラブについて

きっかけはある一人の障害者の方が言った「私も鳥のように自由に空を飛びたい、風のように早く走りたい」という言葉でした。1992年4月に誕生した「ビーバー・バルーンクラブ」は、児童養護施設や肢体不自由児施設の子供たちを中心に「大空を駆けめぐる」感動を味わってもらおうと、1992年7月から西日本地区を中心に、熱気球搭乗体験イベントを実施してまいりました。

「ビーバー・バルーンクラブ」のユニークな点は、メンバーのなかに身障者が多いこともあり、アマチュア無線で連絡を取り合っていることです。これならば身障者の方でも自宅に居ながらにして競技やミーティングなどに参加できます。チームの活動は、各種大会等への出場を目指す練習だけにとどまらず、佐賀市の社会福祉協議会等の協力のもと、社会福祉施設への慰問や地域のボランティアへの参加も積極的に行っております。なお、同チームの活動はあくまでも自発的な意志を尊重しており、メンバー各自の仕事を優先しながら活動しています。